國學院大學学術情報リポジトリ

・第３回　伊藤　聡氏「近世における中世の〈創造〉と古代の〈発見〉」概要

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-07-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000572

令和元年度第３回国学研究プラットフォーム公開レクチャー 伊藤聡氏「近世における中世の〈創造〉と古代の〈発見〉」概要

2019年度第３回国学研究プラットフォーム公開レクチャーは、中世神道を研究している伊藤聡氏を招き、「近世における中世の〈創造〉と古代の〈発見〉」というテーマのもと、近世における中世神道の受容の実態について講演を賜った。

はじめに中世神道研究に関する現在の状況について、神道だけでなく文学や歴史学においても中世研究と近世研究が相互の研究状況を把握できていないことが課題であるとし、中世神道研究と国学研究をつなぐ研究視角として①神話研究、②偽書・偽史研究のふたつの方法があることが提示された。

続いて、中世神道と偽書との関係について、中世における偽書としての神道書を紹介した後、当時は六国史を頂点とする古代書の集合体を「日本紀」と呼称していたことが説明された。

次に、中世においては仮託書の形をとった偽書が多数制作されたことが報告され、聖徳太子の未来記や、胎児の成長を五段階に分類する胎内五位説を示した『生死本源経』などの日本において撰述された偽経、さらに源信などに仮託し仏教の土着化に伴い本覚思想を拡大解釈した文献や、張良に仮託した兵法書などが紹介された。加えて、在原業平の子である滋春に仮託された『伊勢物語髄脳』において、卜部兼友の『神道秘説八家大事』が引用されているなど、これらの仮託書の中には神書として扱われるものも存在していたという。

続いて、吉田兼倶による「過去の改竄」について説明がされた。兼倶は斎場所の由緒や綸旨を捏造し、また吉田家に伝えられていた「八雲神詠」の秘伝を定家から兼直に伝えられたものとして秘伝化した。さらに日蓮宗諸寺院に対し「兼益記」を著し、三十番神信仰は兼益が日蓮に伝えたものであると主張したところ日蓮宗はこれを受容するなど、日蓮宗の神道化には吉田家が大きく寄与しているという。こうした兼倶による改竄行為は中世神道書のもつ偽書としての性格を受け継いでいるものであると結論づけられた。

次に、近世における中世神道批判の実態について説明がされた。近世は林羅山が仏家神道を批判し、また吉見幸和や天野信景などにより吉田神道批判も展開された。一方で幸和は伊勢神道に対しても文献学的な批判を加えており、羅山をはじめ伊勢神道書に基づいて中世神道を批判していた儒家神道家のアイデンティティを揺るがす事態にもつながったという。

続いて、近世における諸家神道説の形成について説明がされた。当時、正親町公通が卜部、橘、忌部などの諸家に神道説が伝来していると言及し、羅山が理当心地神道を大江氏に伝わる神道として位置づけるなど、近世においては様々な家の神道が「中世神道」の名のもとに出現したことが示された。そして山崎闇斎は、それら諸家の神道を統合したものとして垂加神道を構想したという。また、『神代巻口訣』を含め忌部氏秘伝の神道は忌部氏を名乗る広田担斎により盛んに唱えられていたことも紹介された。闇斎は石出帯刀という人物より忌部の秘伝を伝授されたが、帯刀はこの担斎から神道の伝授を受けていたとい

う。さらに『神代巻口訣』の秘伝という形式を持つ『色弗口訣』という写本は忌部流の根本伝承のひとつとして組み込まれていった。ところが、この『色弗口訣』を写したという今出河文斎は、大和の神社の縁起を多数作成している偽書制作者として知られており、本書は「新たな」中世神道書として成立したものであるという。また椿井政隆という人物も近畿各地の地図や縁起を作成しており、彼らによって地域の人びとの期待に沿う形でその地の失われた過去が創造されていったという。こうした「過去の創造」という営みは近世において活発におこなわれるようになり、それは近世諸家神道の叢生と密接に関係していると結論づけられた。

最後に伊藤氏の今後の課題として、中世と近世とをつなぐ偽書の系譜の検討が挙げられた。すなわち、中世の偽書が奥書や著者を捏造する程度であるのに対し、近世の偽書は文献学の発展に沿う形で内容がより精巧になっているという内容の差異はあるものの、中世偽書研究においては中世偽書の性格を積極的に評価したうえで分析しており、その方法は近世の偽書研究においても応用可能であるとした。

伊藤氏の発表後、齋藤公太氏により、本居宣長の産巣日神の解釈と岡田正利の造化三神の解釈が類似しており、その正利の解釈の根拠が『神代巻口訣』であることから、近世の諸家神道と国学とに密接なつながりがある可能性が示唆された。また松本久史氏は、荷田春満が著した『稲荷社由緒注進状』において、秦氏ではなく荷田氏の祖である荷田殷が稲荷山に奉斎したのが稲荷社のはじまりとする説を展開していることを紹介し、偽書制作と国学の発展との関連を指摘した。

その後は質疑応答の時間が設けられ、参加者より多数の質問が寄せられた。まず、仮託が主である中世神道において高度な文献捏造をおこなった吉田兼倶の位置づけについて質問がされ、伊藤氏はこれに対し、兼倶は宮廷人でありまた文献を管理する家の人間であることから、同じく文献を扱う官吏を欺く必要があったとし、それが近世の偽書制作のスタンダードになっていったと回答した。次に、偽書制作の意識に関する中世と近世との差について、中世は偽書制作の目的や方向は分散・並存していたが、近世になると各藩にとって地域の歴史と中央、すなわち正当なものの歴史を結びつけることが重要であると考えられたため、記紀や勅撰和歌集などを中心に据えて偽書制作が行われるようになったと回答した。続いて、偽書制作の意識の差と識字層や階層の差との関連について、近世では出版により広い階層が『日本書紀』を受容可能になったことで秘伝・口伝が否定されざるを得ない状況が発生したと回答した。その一方で、書物に記されていない歴史についても郷土意識や記紀と直結されつつその関心が醸成されていったという。また近世に橘や忌部などの諸家神道が出てきた背景については「家」の意識が根底にあるとし、吉田家は自身の神道説を卜部家に代々伝わるものであると主張することでその権威を保証しており、諸家もこれに倣って古代氏族に連なるという点で自身の神道説の正統性を確保するようになったと回答した。さらに、桜井徳太郎によるケガレの語源説（気・枯れ）について、その典拠が谷川士清にあることが質問者により紹介され、その士清説が何らかの偽書に影響を受けている可能性の有無について質問が寄せられたが、伊藤氏はそれに十分な回答ができないとしながらもその説が吉田家の解釈まで遡れるものなのか、或いは近世に新しく造られたものなのかについては検討する価値があると回答した。

（武田幸也・鈴木健多郎）